論　文

モラル・エージェントとしてのラグビー
—スポーツの教育的価値を考えるために—

上野　裕一
小松佳代子

はじめに

スポーツの教育的価値ということについては，これまで様々に言われてきた。ラグビーというスポーツ一つをとってみても，それは，まっすぐに転がらない楕円球が人生にたとえられたり，“One for All, All for one”というスローガンが社会に出て組織の中で働く若者への教訓となったりしてきた。もちろん，ラグビーが人を惹きつけてやまないのは，その競技特性から来ている。ラグビーには，パスやキックやタックルといった多様なプレイがあり，また，プレイヤーは相手に止められない限りボールを持って何歩でも走ることができる。その意味で極めて自由度の高い競技である。そうした個人のプレイの多様さに加えて，スクラムやラインアウトといった，比較的体の大きな選手たちが，集団でボールを争奪するプレイ，あるいは集団でボールを前進させるモールやラックというプレイもある。それぞれ役割の異なった15人が織りなす多様な連携プレイは，チーム全体の調和，リズム，テンポなどを作り出す。このような競技そのもののおもしろさとともに，この競技が持つ人間形成機能と，そこに深く組み込まれているエートスが，ラグビーの魅力を形づくってきたように思う。例えば，体格で劣る小兵の選手が，大型のフォワード選手の突進を一発でしとめるシーンは，その勇気と技の美しさ，果敢に挑みかかるチャレンジングスピリットを体現するものであり，ここにラグビーの醍醐味を見る人は少なくない。自陣ゴール前の防戦で絶対にゴールラインを渡さないという決意で繰り返し相手に低く突き刺さるタックルの連続は，自チームのプライドの結晶であり，命をもかけた真の闘争の局面にさえ見える。だが，ラグビーの持つこうした人間形成機能やエートスは体験的に語られることはあっても[1)]，十分言語化されてきたとは言えない。それゆえ，ラグビーの魅力は，そのスポーツに魅了された人々の内側で自家撞着的に再生産されるのみ

1）ラグビー経験者による，あるいはラグビーファンの書き手によるエッセイは，それこそ無数にある。しかし，ラグビーの人間形成機能について自覚的に書かれたものは，そう多くはない。畠山

で，いつまでたっても，それに触れたことのない人々に伝わることがないのではないか。

ラグビーがもつ教育的価値を見いだすという課題は，牽強付会と言うべきかもしれない。しかし，自らの戦争体験をもとに，戦争における狂気を回避し得る力をラグビーからつかみとろうとした大西鐵之祐の『闘争の倫理』に見られるように[2)]，教育の目的は平和な社会を構築し得る智慧を持った人間の形成であるべきであり，スポーツの教育的価値も，スポーツを通してこの目的が見通せるところにある。身体と身体を激しくぶつけ合うラグビーが教育的であるのは，その激しさにおいて，なおかつ人間としての倫理が組み込まれなければゲームそのものが成り立たないスポーツだからである。もちろん，あらゆるスポーツが，一定のルールの下での競争という側面を持つ限り，そこにはある一定の倫理性が組み込まれているだろう。この点からすれば，ラグビーはほんの一事例でしかない。しかし，非常に暴力的でもあった民衆娯楽から，教育現場において人格陶冶を担うものへと変遷していくラグビーの歴史は，スポーツと教育との関係を見やすい形で示してくれる恰好の事例であるとも言える。ラグビーを通して自覚的に追求された教育的価値を見ていくことで，スポーツと教育との関係を問い直し，両者がともにゆたかな意味内容を持ちうる手がかりを得ること，それが本稿の課題である。

Ⅰ．民俗フットボールからパブリック・スクールへ

暴力的な民俗フットボールから，パブリックスクールでの人格陶冶を担う集団スポーツとしてのラグビーへの変遷は，今やよく知られるようになっているが，今一度先行研究からその流れを整理しておきたい。イギリスにおけるフットボールの記録は，14世紀あるいは13世紀にまでさかのぼることができるようだが，その記録がフットボールを禁止する布告から得られることに示されているように，それは概して暴力的で危険なものだったことがわかる（マグーン，1985）。当時のフットボールは，スポーツというよりは，

(2002) は，知的障害をもつ人たちが社会自立をする援助にラグビーを生かす実践の紹介である。また，天宮（2003）は，ラグビー部の創設も含めた武蔵野東技能高等専修学校での実践記録である。自閉症児と健常児がラグビーを通じて互いを高めあっていく姿は，NHKスペシャルでも取り上げられた（2003年7月13日放送）。

2）大西（1987）は次のように述べる。「私がスポーツにおける闘争を教育上いちばん重要視するのは，例えばラグビーで今この敵の頭を蹴っていったならば勝てるというような場合，ちょっとまて，それはきたないことだ，と二律背反の心の葛藤を自分でコントロールできること，これがスポーツの最高の教育的価値ではないかと考えるからである。こうした闘争における心の葛藤をコントロールする訓練の積み重ねによって，こういうことを行ってはいけないとか，行ってもよいという，判断によらないで，パッとその時瞬間に正しく行為出来ることが重要ではないか，と考える。判断によらない判断以前の修練からくる正しい行動。判断する材料とか，判断することを教えることはできるが，判断した通りに行うということはその場面，場面を与えられた人間にしかできないのではないか。だから人間が人間を教育する場合にいちばん肝腎なことは，双方の間に絶対的な愛情と信頼があり，その時正しいと思うことを，死を賭しても断固として実行できる意志と習性をつくり上げることだと言うことができよう」。この大西の言を藤島（2003, p. 71）は，「闘争を忘れぬ反戦思想である」としている。

「伝統的な儀式を形成していた」のであり，フットボールの試合はまた，公然たる戦いに発展するかもしれない共同体内部の集団間の「わだかまった緊張をほぐすための」「はけぐち」を与えてくれるものだったのである（エリアス・ダニング，1995, pp. 262-263）。そのような戦いの儀礼化である一方，広く普及した娯楽であることにかこつけて，フットボールの試合が社会的抗議の隠れ蓑として利用されることもあったようである。フットボールの試合は，「何かに不満をもつ土地の人びとが大挙して集まるうえで都合がよく，ときにはきわめて効果的な口実となった」ことをマーカムソン（1993, p. 91）は指摘している。

度重なる禁止の布告にもかかわらず途絶えることなく続けられてきたこうした民俗フットボールが，19世紀にはほとんどの地方から消えていく。その理由としては，法令や警察組織の整備のほかに，産業革命と並行して起こった囲い込みによって，フットボールなどの伝統的な娯楽が行われてきた土地に人々が自由に立ち入ることができなくなってしまったことも挙げられている（山本, 1998, pp. 65-66）。また，エリアスとダニング（1995, pp. 48-49）は，暴力的で危険な民衆の娯楽がルールに則ったスポーツへと転換していくのは，イギリスにおける議会政治の発展と並行していることを指摘している。議会政治の発展は，「多かれ少なかれ自己統治的な貴族とジェントリーの発展」を意味し，スポーツの発展を考えるには，彼らの「人格構造における変化，つまり暴力に関する感受性における変化が考察されねばならない」と述べている。民俗フットボールは，イギリスで18世紀後半から明瞭になってくる社会的・経済的・政治的構造変動と，それにともなう人々の心性の変化に連動して衰退していくのである。

よく知られているように，それに代わってフットボールの担い手になるのがパブリック・スクールである。それぞれの地域に独自の伝統的な儀式としての民俗フットボールからパブリック・スクールにおける集団スポーツへのこの変化の背後には，近代的な統治構造の変容が横たわっている。スポーツの成立を，「歴史に生じてきた非暴力化（文明化）の傾向を直接身体で表象する実践の形式と見ていた」エリアスに対して，多木浩二（1995, p. 35）は，スポーツ誕生の背後にある「国家による暴力の独占」を論じていないと批判する。エリアスの論じる「文明化の過程」は，個々人の内面の規範形成と社会の統治の連動こそを問題にしているので[3]，多木のこの批判は当たっていない。しかし，「フットボールの発展を見ていくと，ゲームの規則の通用する範囲が共同体からネーションへとひろがっていくのが見えてくる」と多木の言辞（多木, p. 37）は，フットボールの変容が当時の統治構造の変容と結びついていたことを示している。民族フットボールからパブリック・スクールを通したルールの統一へというフットボールの変容は，18世紀のイギリス社会を特徴づけていた全国的社会（national society）と地域的文化

3）この点については，（小松, 1999）参照。

(communal culture) との対抗関係 (Wahman, 1992) が解体され，近代的な国家構造が確立していくさまをしるしづけていると言える。いわゆる「19世紀イギリス革命論争」[4] が対象としたように，この時期のイギリスでは資本主義の確立に伴う新たな社会問題に対応するため，一連の行政改革・統治機構改革が推し進められた。中央行政機関の創設という現象は，人々にネーションという意識をもたらしたはずであり，一見こうした行政革命とは何の関係もないかに見えるフットボールのルール化という現象も，時代状況の刻印を受けていることを多木の議論は示している。

フットボールはその後，パブリック・スクールにおいて，アスレティシズム (athleticism) と呼ばれた独特の教育イデオロギーのもと，人格陶冶の手段として重視されていく (村岡, 1987, p. 228)。そして19世紀後半には，膨れ上がる植民地保有を有効な方向へ転換するため，優秀な人材を植民地に投入する必要が生じてくるのにともなって，アスレティシズムの理念は帝国主義の主張とも結びついていくのである (宮島, 1996)。このような展開を念頭におきつつ，19世紀におけるパブリック・スクールとフットボールとの関係をもう少し見ておきたい。

Ⅱ．パブリック・スクールとフットボール

先行研究が示しているように，1830年代以降，パブリック・スクールの数が飛躍的に増大し，1880年代にかけて興隆する。このパブリック・スクール興隆の背景には，「抬頭著しいブルジョワ階級に強烈なジェントルマン化の傾向があった」ことが指摘されている (村岡, p. 236)。しかし，ブルジョワ階級を含む中流階級 (middle class) という概念そのものがこの時期に成立してくることからしても，この言い方には注意が必要である。サイモンが指摘していることだが，19世紀半ばのパブリック・スクールの隆盛は「中流階級の現象」であるにせよ，いわゆる産業ブルジョワジーはむしろ，古典語中心のパブリック・スクールを忌避し，近代科学や近代語を学ぶことのできる中等・高等教育を独自に求めていった[5]。「パブリック・スクールの教育を求めたのは，複雑な結びつきによってジェントリーや貴族政治に伝統的に結びついていた中流階級」，つまり聖職者や軍人などだったのである (Simon, 1975)。この時期のパブリック・スクールの興隆は，産業革命期にあって，近代的教育を求める勢力が次第に力を増してくるのにともない，伝統的な身分秩序が再編されざるを得ない状況を前にして，既存のパブリック・スクール

4)「19世紀イギリス行政革命論争」については，さしあたり (井上, 1982) 参照。

5) 産業ブルジョアジーを代表するのは，哲学的急進派 (Philosophic Radicals) と呼ばれたJ.ベンサムや，ジェームズ・ミルなどである。彼らは，パブリック・スクールの不適切性を指摘し，新たな中等教育機関の設立へ向かう。これがベンサムをして教育論『クレストメイシア (*Chrestomathia*: 有用な学習を意味するベンサムの造語)』を書かせた。また高等教育においても，彼らの力によってユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンが創設される。

の改革も引き起こしていった。

パブリック・スクール改革に大きな役割を果たしたのが，1828年から1842年までラグビー校の校長であったトマス・アーノルドであったことは周知のことであろう。多くのパブリック・スクールが，生徒の学寮内外における無軌道なふるまいに悩まされていた1828年に，ラグビー校の校長として赴任したアーノルドは，パブリック・スクールをクリスチャン・ジェントルマン育成の場へと改革していく。アーノルドの教育実践の中身については，多くの先行研究が明らかにしてくれている。アーノルドは，学校を「人格的共同体」と位置づけ，全寮制の下，各寮の舎監（house master）に教師を配し，自らも校長寮のハウス・マスターとなる。生徒の反乱の温床となっていた監督生制度（prefect system）を「徹底的に改善し，これを性格形成・人格形成のためにフルに活用することを企てた」と言われる（岡田, 1984, p. 97, 白石, 1981も参照）。

アーノルドは1842年に亡くなるのだが，そのすぐ後，1845年にラグビー校の最高学年である第6学級のレヴェ（Leveé）と呼ばれた非公式な集会で，初めて成文フットボールのルールが作られたこと（ダニング・シャド, 1983, p. 109）や，アーノルド以降のパブリック・スクールでチームスポーツの教育的価値が称揚されていくこと，そして何よりもアーノルド校長時代のラグビー校を舞台にしたトマス・ヒューズの『トム・ブラウウンの学校生活（*Tom Brown's Schooldays*）』（1857）が広範に読まれたこと（小石原, 2001参照）などから，アーノルドの教育改革においてもフットボールが大きな役割を果たしていたように受け取られることがある。しかし，アーノルド自身は，スポーツにそれほどの教育的価値を認めてはいなかったようである。クリスチャン・ジェントルマンを育てるために，彼はむしろ古典の陶冶価値を重視しており，ラグビー校におけるスポーツ活動は，「アーノルドが教育的価値を見出して，奨励したというよりも，校内の規律を維持し，自分の意図した改革を達成する上で，生徒たちの協力を得るために支払った代償」という見方さえある[6)]。

アスレティシズム（athleticism）と呼ばれた，集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手段として重視するイデオロギーは，むしろアーノルドの次の世代に当たる校長たち，例えばマールバラ校のG. E. L. コットンや，アピンガム校のE. スリング，ランシング校のH. ウォルフォード，そしてロレット校のH. H. アーモンドなどのもとで展開した（Mangan, 2000, p. 18）。アスレティシズムとはどのようなイデオロギーであり，なぜこの時期のパブリック・スクールで展開したのか，これをマンガンの研究に依拠して考察した上で，モラル・エージェントとしてフットボールを位置づけたロレット校のH. H.

6）これはマッキントッシュ（1968）の見方である。スポーツの教育的価値をめぐるアーノルドの位置づけについては，鈴木（1990）にまとめられている．ここで紹介されているパブリック・スクール研究からも，スポーツに教育的価値を見いだしたアーノルド像は否定される傾向にあることがわかる。

アーモンドの教育論に迫ってみたい。

Ⅲ．アスレティシズムとロレット校

アスレティシズムとは，19世紀後半から20世紀前半にかけて，イギリスのパブリック・スクールに大きな影響を与えたイデオロギーである。マンガンによれば，このイデオロギーによって，価値ある目的を実現する効果的な手段として，身体的鍛錬（physical exercise）が熱心に推し進められた。「価値ある目的」とは，「身体的道徳的勇気，忠誠心，協調性，命令しかつ従う能力」といったもので，これらは「性格形成（character training）」の構成要素として，当時よく知られていたものであった（Mangan, 1975, p. 147）。

アスレティシズムは，なぜこの時期のパブリック・スクールで展開したのだろうか。再びマンガンに依拠すれば，一つは社会統制（social control）のための便宜として，もう一つは，性格形成や道徳的資質を重視する教育理論と結びついて出てきたようである。マールバラやハロウ校が前者の例として挙がっており，こうした学校ではスポーツを公的なカリキュラムに組み込むことによって，生徒を規律化し，学校の秩序維持が図られた（Mangan, 2000, pp. 23-35）。他方，性格形成の観点からアスレティシズムを導入したのが，アッピンガム校のスリングとロレット校のアーモンドである。いわゆる「筋肉的キリスト教（muscular Christianity）」と呼ばれる，身体的健康と性格形成とを結びつける考え方が彼らの背後にはある。

「筋肉的キリスト教」とは，個人主義化する社会に対して，「公正，正義，温情，非利己主義，自己を超える道義のための自己犠牲的献身」といった資質を基盤とした「騎士道」の精神を復活させ，頑強な肉体を通じて社会的善を実現することを目指したものである（阿部, 1997）。この理念を背景として，スポーツやゲームと性格形成とを結びつける言説が展開されるのだが，ロレット校のアーモンドの教育論には，それにとどまらない広がりがあるように思われる。単なるスポーツの奨励にとどまらず，食餌や衣服，そして運動を含んだ健康な生活における「養生（regimen）」にまで，言及しているからである（Mangan, 2000, p. 50）。栄養学やコンディショニング論を動員しながら，スポーツ選手の身体のみならず生活全体を調整しようとする現代のスポーツ科学の状況を見れば，養生にまで踏み込んで身体の健康を考えることは当然とも言えるのだが，アーモンドの場合，単に「健康の科学」を目指したわけではなく，それと「倫理という枠組み（scheme of ethics）」とを平衡させながら教育を考えていたという。とりわけ，クリケットとフットボールは利他的な心（unselfishness）を促進するという点で優れていると考えていたようである（Mangan, 2000, p. 50）。ラグビーがもつ人間形成機能を考えようとする本稿にとって，アーモンドの教育論は重要な示唆を与えてくれるものと考える。

Ⅳ. H. H. アーモンドの教育論

H. H. アーモンド（Hely Hutchinson Almond）は，聖職者の子どもとして1832年グラスゴーで生まれた。1845年グラスゴー大学に入り，1850年には奨学生に選ばれてオックスフォードのベリオールカレッジに進んでいる。しかし，オックスフォードの生活はあまり楽しむことができなかったようで，そのときに慰めとなったのがボート競技だった。ボートは「新しい徳の存在へと彼の精神を開いた」という（Mackenzie , 1905, pp. 15-16）。親戚のラングホーン（Langhorne）一家がロレット校を経営していたため，卒業後の1857年ロレット校に数学教師として赴任する。その後マーチンストン（Merchinston）校で一時働くが，1862年春ロレット校に，経営者そして校長として戻ってくる。

「体育（physical education）を正規の学校システムの重要部だと明示した最初の校長」（Tristram, 1911, p. 71）と言われるアーモンドは，フットボールや体操を奨励しただけでなく，「医学的・科学的」根拠に基づいて，服装や食餌，生活習慣まで配慮した。以下，Mackenzie（1905）およびTristram（1911）に依拠して，アーモンドの実践を概観しておこう。

新鮮な空気を重視して，戸外での運動を勧めるだけでなく，寝るときには窓を開けることを奨励し，清潔さを保つために早朝の冷水浴を習慣づける。服装はリンネルに代えてツィードそしてフランネルのシャツをネクタイなしで着るスタイルで，礼拝の時以外は，上着も帽子もつけず，ズボンに代えて活動的な生活に適したニッカーボッカーが採用された。靴も足にフィットする「解剖学的ブーツ（anatomical boots）」であった。こうした服装が当時のマナーに反するものであったため，多くの批判があったようである。だが，アーモンドは因習や世評（Mrs. Grundy）に囚われることを極度に嫌い，個性の重要性を称揚するJ. S. ミルの『自由論』（1859）にも励まされながら，いかに新奇であっても合理なことがらを追求した（Tristram, pp. 69-70, Mackenzie, p. 75）。十分な食事を供することで間食をやめさせ，睡眠時間などにも配慮して健全な習慣づけを行う。こうしたロレット校の「身体的システム（physical system）」は，強制ではなく説得によって生徒に課したと言われる。

アーモンドがこのように，運動や健康を重視するのは，知識の詰め込みよりも「性格形成（the training of character）」がはるかに重要だと考えていたからである（Tristram, p. 72）。彼の体育論はそれゆえ，身体の鍛錬によって道徳性を身につけさせようとするものであった[7)]。運動競技をこのように道徳的観点から捉えていたアーモンドは，「よくある学校スポーツのシステム」には反対した。それが，個人的な対抗関係（rivalry）を導き自分自身の栄誉と地位向上のために仲間をうち負かそうとするようなものだから，というのがその理由である。個人的な対抗関係を回避するためにアーモンドが重視するのが，学校対抗戦（Interscholastics）である。学校対抗戦においては，個々人が学校の

ために勝とうとするからである。

しかし，学校対抗戦でも，スポーツの種類によって利己心を抑制できないものがある。「ゴルフは，学校を重視する感情（school feeling）や，高尚な精神や，勇気や，忍耐といったものを育てることができない」とアーモンドは述べる。陸上競技やクリケットに期待を寄せた時期もあるが，それらもゴルフと同じように利己的なものになりつつあるという。そしてアーモンドは，雑誌『タトラー（*Tatler*）』の編集者に向けた手紙の中で次のように述べる。「フットボールはさらに利己的ではない（Football is much less selfish）。しかしこの競技においても，私はつねに誰が得点をあげたかということを強調するようなことはやめるように諭している。それでもフットボールにおいて利己的なプレイヤーはいる。つまり，自分よりも得点をあげるチャンスがある人にパスしないというようなプレイヤーである。そのようなプレイヤーは我々のチームからは追い出される」（Mackenzie, p. 202）。

アーモンドにとって，フットボールは生徒の倫理性を高めるスポーツとして位置づいていた。そのことは，後に彼が「モラル・エージェントとしてのフットボール」という論文（Almond, 1893）を書くことからもわかる。アーモンドの書いたものは，あまり読まれなかったようだが，この論文だけは本国と，そしてニュージーランドでも注目されたという（Mackenzie, p. 254）。この論文において，アーモンドは，フットボールが「循環を早め，精神を向上させ，血液を浄化させる」ものであり，そうしたものは，「そのこと自体で（*ipso facto*）モラル・エージェントである」と述べている（Almond, p. 902）。フットボールについて，さらに，「それがただ存在するだけでも，またそれが説く実践的な教訓は，若い時期の純粋さについて書かれた全ての書物に匹敵する」とまで言う（Almond, p. 903）。「スクラムは偉大な教育者である」とも述べている（Almond, p. 903）。上で見てきたような，食餌や服装，健全な習慣にも言及しながら，フットボールが，ある徳（それはあまりに現代的すぎて，まだ明確な呼称がないとアーモンドは述べているのだが）の訓練場になることを強調する（Almond, p. 904）。特に，ラグビーは，その競技の性質上，密集状態ができ，レフリーがすべてのプレイをチェックすることは難しい。それゆえ「ラグビーという競技には，ある一定の，善意（*bona fides*）がなければならず，そうでなければすぐに競技ができなくなる」（Almond, p. 909）と主張している。ラグビーが激しいスポーツであるがゆえに，他のスポーツ以上に厳しい倫理性を求められると考えるアーモンドは，フットボールが「広く言えば節制（temperance writ large）」（Almond, p. 904）を訓練するものであり，その意味において，「理論的・実践的に未来の市民を訓練したいと望むすべての人にとって，フットボールは教科書となる」（Almond, p. 905）と考えてい

7）この意味において，同時代に刊行されたスペンサーの『知育・徳育・体育論』（1861）に非常に近いが，マッケンジーは，ロレット校の体育システムは，アーモンドがスペンサーを読む前にすでにできあがっていたとしている（Mackenzie, p. 230）。

た。

「広く言えば節制」と呼ばれる，アーモンドが目指した徳とは，「知的なものと身体的なものが溶け合った，たぐいまれな性質」であり，また，「アーモンドの倫理の枠組みには，それを持つ人だけが満足するような性質のものは存在しない」として，「全体の利益」と結びついた個人の徳という面も持っていることが指摘されている（Mackenzie, p. 247)。ここにおいて，ラグビーは，宗教とも並び立つような高い倫理的要素を醸成するものと位置づけられる。

スコットランドという地で，生徒数も安定しない中で[8)]，伝統があるわけではない学校を経営する立場にあって，アーモンドはラグビーを中心としたスポーツの力を最大限に利用する。実際，ロレット校の卒業生がオックスフォード大学の大学代表チームに何人も選ばれるようになることで，人々はロレット校を「偉大なフットボール校」と見なすようになった（Tristram, p. 157)。しかしそれは，単に優れた選手を大学に送り込むことによって学校の名を上げたということではない。生徒の身体，生活習慣，そして道徳性にまで踏み込んで，合理的であれば伝統に反することでも決してひるまず，自らの教育方針を貫いたアーモンドの実践は，生徒たちに進取の気性を持たせていったと思われる。モラル・エージェントとしてのフットボールを根幹としたアーモンドの教育論は，スポーツが教育的価値を持つとはどういうことかを充分に示している。

おわりに

見てきたように，アーモンドの教育論は，身体的訓練を中心としてはいるが，その背後に，食餌や服装，健全な習慣などにも配慮した「養生」を組み込んで，生徒を総体として育て上げようとするものであった。それは，新興パブリック・スクールとしてロレット校が認められていく地歩を築くものであった。このアーモンドの教育論は，見てきたような，伝統的な身分秩序の再編や，パブリック・スクール改革，あるいは帝国主義と結びついたアスレティシズムの展開などを背景とした新奇な教育のあり方だったのだろうか。

教育史の最新の研究が示しているように，教育（education）の意味世界は，近代以降に市民社会の不即不離の形で成立した学校教育中心の狭いものではなく，古代以来，魂への配慮・ケアとして把握されるような広がりをもっていた（寺崎, 2004)。そして，このような魂への配慮とは，客体化された身体が成立する以前の身心未分のからだを対象とし，まさに養生として理解されるべきものなのである（寺崎, 2001)。さらに，寺崎

8）アーモンドが校長になった1862年には生徒数はわずか14人であった（Mackenzie, p. 36)。それが1878年までには100人になった（Tristram, p. 132)。アーモンドの教育方針が，人々をいかに惹きつけていったかがこのことからもわかる。

(2001) が示しているように，ギリシャ語の「養生」とは，単に食やからだへの配慮にとどまらず，生の技法（mode of life, a way of living）などの意味をも含むものであった。「つまり，養生（ディアイタ）とは，人間の文化そのものを指し示す語なのであり，生活するときの配慮，何に自覚的にいきてゆくか，その智慧なのであって，人間の生（life）それ自体ですらあるのである」(寺﨑, 2001, p. 7)。モラル・エージェントという側面からスポーツを捉えることは，このように，教育や身体という近代的な概念を問い直し，それが近代以前に持っていたゆたかな意味世界を垣間見ることにもつながっていく。

人が育つということは，単なる能力の伸長などでは決してなく，身心未分化のもとにあるからだ，つまり魂への配慮をも射程に入れて考えられるべきものである。鍛え上げた肉体を相手と激しくぶつけ合うラグビーというスポーツがモラル・エージェントとなるということは，激しいぶつかり合いを可能にする身体をつくりつつ，そこに高度な倫理規範を持ち込むこと，そのためにはおそらく人間の生き方そのものに関わる広く深い教養とも結びついた独特のエートスが醸成されるということを意味していると考えるべきであろう。スポーツが文化になるとすれば，それが人間の生そのものに関わり，人間の生の総体をゆたかにすることができるからこそだと言わなければならない。スポーツの教育的価値も，この観点から問い直していかなければならない。まだ問いは始まったばかりである。

参考文献

Almond, H. H.（1893）Football as a Moral Agent. *Nineteenth Century*, 34: 899-911. 上野裕一・小松佳代子訳「モラル・エージェントとしてのフットボール」流通経済大学社会学部『社会学部論叢』第16巻 第2号 2006: 125-141.

阿部生雄（1997）「筋肉的キリスト教の理念－男らしさとスポーツ－」『体育の科学』47: 415-419.

天宮一夫（2003）『ラグビーボールを抱きしめて』文芸社

ダニング, E., シャド, K.『ラグビーとイギリス人』ベースボール・マガジン社

エリアス, N.（1977 / 1978）『文明化の過程（上）／（下）』法政大学出版局

エリアス, N., ダニング, E.：大平章訳（1995）『スポーツと文明化－興奮の探求－』法政大学出版局

藤島大（2003）『知と熱－日本ラグビーの変革者・大西鐵之祐－』文春文庫

畠山文裕（2002）「ラグビーを楽しむ」『教育と医学』50（12）: 52-57.

井上洋（1982）「『十九世紀イギリス行政革命論争』に関する一考察（一）」名古屋大学『法政論集』93: 95-147.

小石原美保（2001）「アスレティシズムの文学像に関する一考察－『トム・ブラウンの学校生活』（1857）をめぐって－」『体育学研究』35（4）: 301-311.

小松佳代子（1999）「統治・教育・自己－近代教育のストラテジーをめぐって－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39: 47-58.

Mackenzie, R. J. (1905) *Almond of Loretto: Being the Life and a Selection from the Letters of Hely Hutchinson Almond,* Archibald Constable.

マグーン, F. P. : 忍足欣四郎訳 (1985)『フットボールの社会史』岩波新書

マーカムソン, R. W. : 川島昭夫ほか訳 (1993)『英国社会の民衆娯楽』平凡社

Mangan, J. A. (1975) Athleticism: A Case Study of the Evolution of an Educational Ideology, in; Simon, B. & Bradley eds., *The Victorian Public School: Studies in the Development of an Educational Institution,* Gill and Macmillan.

Mangan, J. A. (2000) *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School: The Emergence and Consolidation of an Educational Ideology,* Frank Cass.

McIntosh, P. C. (1968) *Physical Education in England since 1800,* G. Bells & Sons.

ミル, J. S. (1971)『自由論』岩波文庫

宮島健次 (1996)「パブリックスクールとアスレティシズム－Clarendon ReportにおけるEtonの教育課程を例にして－」日本大学『教育学雑誌』30: 43-59.

村岡健次 (1987)「『アスレティシズム』とジェントルマン－19世紀パブリック・スクールにおける集団スポーツについて－」村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房

岡田渥美 (1984)「トマス・アーノルドの学校改革」『京都大学教育学部紀要』30: 80-118.

大西鐵之祐ほか (1987)『闘争の倫理－スポーツの本源を問う－』二玄社

Simon, B. (1975) Introduction, in; Simon, B. & Bradley, I. eds., *The Victorian Public School: Studies in the Development of an Educational Institution,* Gill and Macmillan.

白石晃一 (1981)「トマス・アーノルドのラグビー校教育についての一考察」筑波大学『教育系論集』5: 21-33.

スペンサー : 三笠乙彦訳 (1969)『知育・徳育・体育論』明治図書

鈴木秀人 (1990)「英国パブリック・スクール研究に見られる研究動向－スポーツ教育成立過程におけるトマス・アーノルドに対する評価を中心に－」『東京体育学研究』14 (5) : 31-35.

多木浩二 (1995)『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム－』ちくま新書

寺崎弘昭 (2001)「養生論の原像とその歴史的射程」『日本の科学者』36 (7) : 5-9.

寺崎弘昭 (2004)『ヨーロッパ教育関連語彙の系譜に関する基礎的研究』平成13-15年度科学研究費補助金 (基礎研究 (C) (2)) 研究成果報告書

Tristram, H. B. (1911) *Loretto School: Past and Present,* T. Fisher Unwin.

Wahman, D. (1992) National Society, Communal Culture: An Argument about the Recent Historiography of Eighteenth Century Britain. *Social History* 17 (1) : 43-72.

山本浩 (1998)『フットボールの文化史』ちくま新書